

紅旗征戎非吾事 I

隣国の韓国では、大統領の弾劾で大騒ぎだが、その様子を見て、私の頭に浮かんだのは藤原定家であった。定家とはどんな人かを、最もわかりやすく言うと、百人一首を作った人ということになる。百人一首の個々の歌は、それぞれの歌人が作ったものだから、正確には、鎌倉幕府の宇都宮頼綱という御家人の別荘（小倉山荘）の襖絵として、万葉集以来の和歌集の中から 100 人の歌人の歌を選んで、装飾用の色紙に書いた人ということになる。定家は、その時代の和歌の第一人者で、百人一首の中の彼の歌は、「采ぬ人を、松帆の浦の夕風に、焼くや藻しおの身も焦がれつつ」というものすごく暑苦しい歌である。現代語に直訳すると、「船で来ると言ったから、松帆の浦で待っていたのに、一向に来ない。そのうち夕風になって風が止まって、クソ暑いのに、そばで焚火を始めたやつがいる。ふざけんな馬鹿野郎」という歌である。これは、直訳というやつで、背景を考えないで字面だけで訳すとうなる。間違えているわけではない。和歌というのは恋歌が多く、その多くは失恋の歌である。それを前提に、松帆の浦という場所を考えると、色っぽい歌になる。松帆は淡路島北部の港で明石海峡に面している。当時は製塩業があった。平安や鎌倉時代の製塩は、海に生えている藻潮草を燃やして塩を得ていた。この藻潮草を刈るのは女性で、今でいえば海女である。藻潮草を焼いているのは若い海女である。こうなると、この歌は、突然色っぽい歌になって、セミヌードの女性が表れる。

この女性が、帰って来ない男を待っているのである。港で待つ女というのは、演歌にしばしば出てくるテーマで、例えば、森進一の「港町ブルース」は港で男を待つ女の歌である。港町ブルースの女はかなり年が行っているのであるが、定家の歌の女性は、まだ若い、初恋だから、男が帰ってくることを信じて待っているのである。この状況に最も似ているのは、演歌だと都はるみの「あんこ椿は恋の花」である。長くなるので一部だけ引用する。

三原山から 吹き出す煙
北へなびけば 思い出す
惚れちゃならない 都の人に
寄せる思いが 火と燃えて
あんこ椿は あんこ椿は
アァア アン アン すすりなき
(あとはネットで調べてください。)

定家の歌の情緒とはかなり違うという意見があるかもしれないが、定家の歌は、男が女性の気持ちを書いているので、男の願望が入っている。定家自身は政府の役人だから、現地の女性と恋愛をしても、その女性を現地に捨てて都に帰るということを、平然としてできる。

そういう 種類 の人間 である。そういう 人間の勝手な願望 を書いているのだ。もし 女性の立場 で歌ったら、都はるみの 様に、力を込めて、アーアーアーンアーンア と力いっぱい 泣くかもしれないだろう。まさにその 場面 である。ここまで 書いて思いついたのだが、ひょっとすると、この歌には教育的 な価値 があるかもしれない。あまり 若くしてそういうことをすると、そんな目に合うから、不順異性交遊 をするなど、 実例 を挙げて女子中高生 に教育する歌として使えらるだろう。

教科書 を紐解けば、この 歌は本歌 通りの和歌で、本歌があるという 説明 があると思う。残念ながら、私は本歌 が何か知らない。教わったけれど、忘れてしまったのかもしれない。本歌 が詠まれた 背景 がわからないと、定家のこの 歌に込めた真意 は、よくわからない。だがとにかく、藻潮草 を焼いているのは 女性 なのだ。書かれた 言葉 だけ読めば、港で男を待つ女の歌 である。そうでなければ、夕風 の暑さに 頭に 来た男の歌と 解釈 するしかない。

さて、それはそれとして、紅旗征戎非吾事。コウキ、セイジユウ、ワガ コトニ、アラズ と読む。紅旗 というのは何か。よくわからないが、多分、旭日旗 のような 軍旗 で、平家の赤旗 のことかもしれない。征戎 はそのまま エビス を征服すること で、そのまま 読めば、争いごとは、私の知ったことではない。」ということになる。

元々は中国 の古典 にあるのだろう（漢文 そのままの 感じだから）。この 言葉 は、明月記 に出てくる。明月記 は、定家の書いた 日記 だと、ネット を調べると出てくるのだが、我々が書く 日記 とはかなり 違う。平安時代 の身分 の高い公家の多くは 日記 を書いている。公家の世界は、先例主義 というやつで、何かをするときに 前例 に倣って行く。皇位継承 で3種の神器 などという ことで 良いものが 今でも 出てくるのは、先例主義 からだ。町内の 祭り だって先例主義 だ。これを 有職故事 という。公家の 争いごとでは、それぞれの 主張 の正当性 を先例主義 によって裏付ける。そうすると、過去の 例 を多く知っている 方が有利 だ。だから、身分 の高い公家の家では、日記 のような 形で前例 を記録 しておく。定家はそれがしたかったのだと思う。明月記 は、私的なこと だけを書いた 日記 ではない。個人的感想 を含めた 記録 というべきだろう。

明月記 は、定家が 18 歳の時から 始まり、56 年間にわたり 書かれている のだが、現存するものは、定家自身 が日々自らの 手で記した ものではない。定家が 72 歳で出家したあとに、自分自身 が書いた 日記 を元に書き写したもので、定家自身 もこの 浄書 に参加しているが、数人が 右筆 として 浄書 に加わっている。だから 現存するも 明月記 には、定家自身 の書も含まれているが、他の人の書も含まれている。その 内容は、その時点で、書き換えられている 可能性がある。ここが 問題を複雑 にしている。明月記 の日付 をそのまま 信じれば、定家は、かなり若くして、高らかに「紅旗征戎、吾 が事にあらず。」と言ったことになる。つまり、政治 や軍事 でなくて、和歌 の世界一筋 に生きると 宣言 したことになる。そのように 理解 した上で、定家の和歌、たとえば、代表作 の一つ、「春の夜の夢の浮橋とだえして、峰にわかるる 横雲の空」春の夢のような 淡い恋愛 が終わって、空を見上げると、雲が流れて、山の峰によって、

2つに分かれていく。私とあなたの様に)を読むと、幻想的で耽美的な世界が表れて、定家の生き方を、芸術至上主義的な生き方だったのだと思ってしまう。今でいえば、大谷翔平や藤井聡太のように、若くして自分の生きるべき道を見つけて、まっしぐらにその道を進んで、大芸術家になったという感じになる。和歌だけで、定家を評価する人の間では、そのような評価が多いと思う。芸術の道にまっしぐらだったから、公家としてはあまり出世しなかったという評価になっている。しかし、このような理解は正しくないような気がする。あまり、出世しなかったと言っても、権中納言になっているのだ。良く知らないけど、その上は、中納言、権大納言、大納言、太政大臣 しかないと思う。多分、現代の会社で言えば会社の役員にはなっている。かなり高い地位だ。後鳥羽上皇に取り入ったり、武家側では源実朝（征夷大將軍）にも和歌を教えて、弟子にしている。だから、定家は、当時の最高権力者の傍らにいた人物であり。決して権力の中核から遠い人ではない。苦勞はしたのだろうけれど、藤原家でも傍系の定家がそこまで出世すれば十分だと思う。出世欲のある人で、決して芸術至上主義者ではない。和歌は後鳥羽上皇や実朝に取り入ったりする道具として機能したのだ。

ちなみに、百人一首の後鳥羽上皇の歌は、「人もをし、人もうらめし、あじきなく、世を思う故に、もの思う身は」で、現代文に訳すと、「いいヤツもいるけど、ヤなやつもいるから、嫌になっちゃうよ ナー、俺だっていろいろ考えているのに、やってらんねー。」という、まことに素直に自分の気持ちを歌った歌である。後鳥羽上皇の歌は素直に自分の気持ちをうたったものが多いとされているので、この現代語訳で良いと思う。百人一首の源実朝（鎌倉右大臣）の歌は、「世の中は常にもがもな、渚こぐ、海人の小舟の、綱手かなしも」。現代文に訳すと、「世の中はこうでなくちゃいけないよな。渚をいく漁師の船の上のロープもナンカかっこいいぜ。」となる。実朝は若くして暗殺された悲劇の將軍なのだが、子供の時に征夷大將軍になって、そのまま大人になっちゃった。ボンボンで、和歌や蹴鞠など公家趣味だ。万葉集のような、のびやかで、屈託のない、おおらかな歌が多い。斎藤茂吉は、実朝を歌人として絶賛している。そうかもしれないけど、のんびり、こんなどうだっていい和歌を詠っているから、甥の公暁にあっさり暗殺されちゃったんだと思う。実朝という名前は、後鳥羽上皇が与えた名前だから、実朝と上皇の関係は多分よかったのだと思う。ほんとのところは良く知らないけど。実朝の暗殺後、鎌倉幕府は執権の北条氏の支配になる。多分それで、後鳥羽上皇は、もっと「やってらんねー」となって、頭にきて承久の乱をおこして、島流しになったのだと思う。これも良く知らないけど。

それはそれとして、明月記が浄書されて現本が廃棄されたのは、その後のことだから、もし、その浄書の時に、定家が「紅旗征戎非吾事」と書き加えたのであれば、だいぶ話が変わってくる。何故書き換えたかったのかという話である。

まず、考えられるのは、言い訳である。定家は後鳥羽上皇に仕えていたようなものだし、公

家と武士は対立関係にあったとしても、後鳥羽上皇と実朝は、お互いに趣味が共通して、関係は良かった。この人間関係の中に定家もいた。そのうちの一人が暗殺されて、もう一人は島流しだ。結果的に、定家の属する公家勢力の政治力は衰退し、北条氏による執権政治となってしまう。賊軍側として、定家の立場は、あまり居心地の良いものではなかったと思う。だから、「ボク関係ないからね。だって、ボクは歌人でそっちに夢中で、それ以外のことはワカンナイモン。」と言いたかったのかもしれない。もう一つは、「嫌になっちゃった説」である。定家は歌会の後や新古今集の編集会議の後などに、後鳥羽上皇の愚痴を多分聞いていたのだと思う。実朝だって、母親の北条政子が、あーやれ、こうやれと、うるさく干渉（多分、和歌なんか詠んでいないで、弓・剣道・馬術のおけいこをしなさいと、口うるさかったんじゃないかと思う。）してきて、ボクどうすればいいのと、和歌のおけいこの時に、定家に相談したかもしれない。定家自身、自分だって、心ならずも、様々な戦いや、政変に付き合ってきたけれど、今考えると、そんなことをせずに、和歌だけやっていたらよかったと、つくづくそう思ったのかもしれない。それで明月記の内容を書き換えたのではないか。私には、その方が納得がいく。私は、定家の歌があまり好きではない。確かにすごくうまいし、その技巧は和漢に通じた豊富な知識に裏打ちされている。たとえば、「来ぬ人を・・・」の百人一首の歌だって、かなり知識量がないと意味が伝わらない。知識のない私に意味が伝わったのは、たまたま、私が水産関係の研究者で、古代の製塩法を知っていて、「港で待つのは女」という演歌のルールを知っていたからだ。それは定家にとっても私にとっても幸運だった。それがなければ、教養のない私に歌の意味が分るはずがない。暑くて頭にきた男の歌にしか読めない。定家に言わせれば、そんな無知な奴は、自分の歌の鑑賞者として想定していないということなのだと思うが、こっちとしても、「あーそうかい。じゃーサヨナラ」となってしまう。多分、定家という人は、気の強い勉強家なのだと思う。かなりの勉強量で努力家だ。そして、ある程度出世した。怠け者の私としては、そこが好きになれない。阿保みたいな実朝の方が好きだ。定家にしても、さまざまなことがあって、晩年を迎えて、自分の好きな和歌をもっと楽しんでやればよかったと、思って、改ざんしたのかもしれない。

やっとなら、ここで、話が韓国の政治に戻る。言いたいことは伝わっただろうか。何となく伝わったかもしれないが、一応、説明しておく。

つまり、あんなことに国を挙げて夢中になっているのが、わからないのだ。何でそんなことに夢中になれるのか。夢中になって、自分たちの考える悪を成敗しようとしている。韓国の中に、「紅旗征戎非吾事」と言える人は一人もいないのか。多分、いるのだろうけれど、そういう人は取り上げられずに、表に出てこないのかもしれない。国会前とか特殊な場所を除くと、韓国の町は比較的落ち着いているようだ。それはそうだろう。多くの人にとって、大統領の罷免などというのは、どうでも良いことだし、韓国経済がうまくいかないのは、中国

に経済に過度に依存したからで、その構造が改善されない限り、誰が大統領になろうと韓国経済が良くなるはずがないということも理解しているのだろう。そういう人は表に出てこないということなのかもしれない。

(紅旗征戎非吾事 II につづく)
